

## JARA 強化戦略策定タスクフォース（第 3 回）

### 議事要旨

#### (1) アンケート結果（速報値）の報告

- 次期戦略計画のためのアンケートを実施し、413 の回答を得た。回答者の属性については、概ね日本のローイングコミュニティの実態に即した回答者からの回答があった。
- 特筆すべき点としては、JARA Vision2020 について知らないと回答した方が 51%、知っているが読んでないという方が 23%。4 人に 3 人は JARA Vision2020 を知らない。このようなことが初めて明らかになった。
- その他、強化方針、オリンピックパラリンピックの目標についても知らない、読んでないという方が大半であった。
- オリンピックパラリンピックについて JARA に期待することとして、競技成績よりも「ローイングの知名度向上」や「知名度向上のために力を尽くしてほしい」というような回答であった。これも協会としては知らなかったことではないか。
- その他、自由記述へのコメントも多くいただいている。第 4 回のタスクフォースで報告予定。

#### (意見交換)

- アンケートの結果について、留意しておいた方がよいことはあるか。例えば、カヌーの例でいえば、羽根田選手がオリンピックでメダルを獲得した時に知名度も上がり、テレビ等で取り上げられる回数が増えた。ローイングでも類似事例が起これば効果が出るかもしれないが、日常活動の中でローイングのことを知ってもらうためには、国民に情報が流れなければならない。それをどうするか。
- JARA Vision2020 はホームページを見ても 2021 年頃まで遡らないと発見できない。例えば、ホームページ左側のタブに入れるような工夫が必要ではないか。
- パラローイングは全く知名度がない。パラローイングをやったことがないような地域で強化合宿を行うようにしている。例えば鳥取県米子市や岐阜県、秋田県大潟村等色々なところからお声がけ頂き、合宿で何うと、首長への挨拶や地元マスコミからの取材などでニュースになり、知名度向上にはなると考えている。スポーツ施設のユニバーサル化のきっかけとなっている。
- 喫緊の課題は、部活動改革である。例えば名古屋市では、既に地域移行が進んでいる。このままではローイングを始めるきっかけが少なくなり、競技人

口は更に減っていくのではないか。

- 部活動の地域移行において、どのようにすればローイングの人口を確保できるか。これはJARAだけではなく、地域との連携をして一緒になって考えて、行動していかないと難しい。一度、JARA と地域の関係者との間で相談し、具体案を編み出す活動をしないといけないかもしれない。

## (2) これまでの論点について

- 第2回までの議論をまとめ、論点として事前に各委員の皆様にお送りした。今回は医科学委員会、パラローイング委員会、指導者育成委員会、企画戦略担当から回答があった。

## (3) 各委員会からの提案（※補足説明のみ記載）

### 医科学委員会

- 個別論点に対してではなく、委員会としてどのように強化へ貢献できるか、具体的なことを書かせていただいた。コンディショニングに関しては、今の人員で実現可能なことを提案。トレーニングに関しては、年1回開かれるWorld Rowingのコーチングカンファレンスに参加されている日浦先生から情報をアップデートいただきながら、強化委員会と連携していきたい。
- これらの提案は、クラシックだけではなく、パラローイングやコースタル種別も含めて、全面的にカバーできたらと考えている。

### パラローイング委員会

- オリ・パラ競技では強化戦略プランで目標設定をしているが、最終的にオリ・パラ、或いは世界選手権の8位以内の成績を出していかないといけない。例年1千万円程度の予算だったところ、昨年のパリ大会で森選手が8位入賞したことで、今年は1.6千万円弱予算がついた。こんなに上がるものかとしみじみ感じた。安定的に入賞以上の成績を出していかないとなかなか強化費も上がらない。本番で決勝進出可能性の高い種目を優先すべき。
- パラローイングについては、育成や選考というより、育成する選手を見つけることの方が大事である。選手を見つけた後の育成環境を作ることが難しくいため、ローイングの練習環境があるところで連携・発掘した方がいいと考えている。
- 実業団レベルの練習環境を作ることが本当の強化につながっている。実業団がパラ選手に門戸を開いていただくようなことを働きかけていきたいと考えている。特にパラ選手の場合は、生活が安定しないとスポーツどころではない。

## 指導者育成委員会

- 当委員会としては、勝利至上主義ではなく、指導者の質や人間力を向上することを重視している。NTC（ナショナルトレーニングセンター）にも掲示されている「人間力なくして競技力向上なし」ということ。
- 国スポの会場では、公衆の面前でジュニア選手に厳しく指導をしている指導者がいる。未来のトップアスリートの育成にもつながる話である。JSPO 資格取得の中でも徹底して伝えていきたい。

## 企画戦略担当

- 競技者だった頃から、日本代表チームは“シングルスカラーがダブルスカルに乗ってシングルスカルを漕いでいる”という様な状況であった。クルーとして成熟したものを作っているという実感が全くなかったし、外から見ていても感じなかった。
- 資料の\*印について、指導者資格で学ぶことは指導者として最低限有しておくべき知識や理解である。その資格を取った方々が専門人材として高いレベルで活躍して貰うという意味合いで書かせて頂いた。全く別物だということではなく、繋がりながらも、議論は切り離して考えた方がいいという提案である。

## 強化委員会

- 事前提出には間に合わなかったが、発言させていただきたい。
- ナショナルチームは、結果を残すだけではなく、スポーツの価値を追求して、誰もが憧れるような集団であるべき。強化活動を通して、発信していかなくてはいけないと思っている。
- 目標に関しては、当然ブリスベンに向け、「メダル」は一つキーワードになる。ロスに関しては、現状 8 位入賞レベル。やはり最高位を目指しながら、多分ブリスベンのメダルは到達できないようなレベルだと思うので、ファイナル A の中でも少しでも上のレベルを目指す。
- 前回のヒアリングでも選手から発言があったように、現段階では小艇の強化が必須。クルーを組みたいが、現状は男子シングルスカル、ペア。女子は、シングルスカルとフォアという形でのチャレンジと考えている。2027 年以降は、ある程度ロスに向け選択と集中を行うべきタイミングであるから、逆に 2027 年以降にブリスベンに向けた次世代チームをスタートさせる考えを持っている。
- 体制強化は絶対に必要。ヘッドコーチは、10 月からでも起用したい。今はマネジメント体制が不足しているため、ハイパフォーマンスアシスタンディレクターやタレント発掘のキーマンのような人材も必要。医学体制の補強は、我々としてもお願いしたい。

- コースタル委員会とは、対 JOC や所属団体との連携の中で、一本化することも検討したい。
- 行き過ぎた「個の重視」による弊害とあるが、個の選考を無きにはできない。総括や選手の方からもコーチの主観という言葉があったが、公平公正な選考という観点では難しいと考えている。そういう意味では、SBS は非常に公正公平な選考が行われている。
- パフォーマンスの最大化には、コーチや現場のマネジメントに限界がある。タスクフォースの流れの中で、関係する専門家のサポートを得たい。チーム力については、コーチも一生懸命やってきた。選手自身も成長していかないと、中々一体になるという部分で難しいと感じている。
- 各コーチとの連携はできているが、選手を支える体制に問題が生じている。東京大会以降、社会人団体との連携は改善できつつあるが、十分と言えない団体もある。大学カテゴリーに関しては、大学連盟との連携が課題。
- ギザビエ体制を終え、これからどのような方向に持っていくのか。我々の考えにフィットするコーチのもとで、日本のローイングの価値を高める、競技力を高めることをやっていけば、継承されていくのではないかと。
- ローイングの主戦場はヨーロッパである。現状エギューベレットはコストや利便性の面で良いと考える。欧州に一拠点が必要。

#### (4) 論点に対する意見交換

- 身の丈にあったコーチ体制マネジメント体制は大きな課題ではないか。現在、様々な層の選手が海外遠征に行っているが、マネジメント面や予算面からも分散しているのでは。費用も環境ももっと集中させるという考えもある。他方、強化委員会の経験値向上や次世代を積み上げるという考えも十分ある。協会全体で検討するようなマターではないか。
- 強化委員会としては、そのカテゴリーのトップ選手を経験させることが重要だと認識。「身の丈」とは、財源の観点と体制の観点だと思うが、トップグループと次のグループを見続けられるという体制を構築していく必要性があると思っている。
- 総括における選手や指導者へのヒアリングの中で、あるワールドカップに 30 名の選手が派遣され、3 名の指導者で対応をしていたと聞いた。選手 30 名に対し指導者 3 名では、フィードバックをしたり、技術向上に関する議論をしたりする時間はなかったのではないかと。今の指導体制に見合った派遣人数にしていかなければいけない。またクルーを指導する人たちの権限と責任を明確にしていく必要があるのではないかと。
- 当時は、2022 年のアジア大会を控えた年で、チームを二つに分けなければ

ならない状況だった。その後サポートコーチ制度を導入し、体制を整えてきた。今後は 20 名を超える選手派遣は考えにくい。

- 今年は、世界選手権が中国上海で開催である。SBS 評価において、B 代表が A 代表に近いレベルであることが確認できたため、今回は一緒に行かせている。ヘッドコーチがいない状況であり、各コーチには無理をさせている状況。
- 2023-2024 に関しては、所属団体からコーチを派遣してもらった。所属団体へのヒアリングで「所属団体の指導者の経験値を上げるべき」という指摘からも、所属団体の指導者に協力を仰ぐことが重要と考える。
- 全日本選手権で優勝したエイトが国際大会にチャレンジしたいという要望があれば、派遣してあげてほしい。
- 個のパフォーマンスが高く、クルーボートでも評価できればエイトでの派遣も考えられる。財源によって、派遣するレベルが決まるのではなく、派遣するレベルに応じて財源を工面する。所属団体から費用負担も頂きながら国際大会へ派遣することが、オリンピックに繋がっていくと考える。
- 指導者育成委員会では、委員会内にコーチ・テクニカル部会を作った。強化委員長や日浦委員長にも相談できる体制となっており、今後は PDCA をいかに回していくかが重要と考える。ローイングは、ナショナルチームでもコーチ 4 未取得者がいる状況。
- 現実的なやり方で実行していくことが必要。日本のコーチ陣は非常に体制が薄い。強化委員長は体制づくりに苦労しているが、現実的にギザビエ体制の下でも全体コーチ体制が非常に弱かったと言わざるを得ない。
- サポートコーチ等の仕組みを導入することはいいことだが、本来のナショナルコーチになるべき人たちが一定の水準で確保されてないと、いつまでたっても日本の選手を本当に指導する体制というのは確立できない。指導者委員会のテクニカルサポートによりコーチを育てる体制が強化されること、適切に実行されていくことを望む。
- 30 人の選手に対してコーチ 3 人でいいのか。本来理想とすべき指導者の水準があるはず。複数年の計画を立て、コーチを育てていく必要がある。強化戦略計画では、選手に対するトレーニングだけではなく、コーチを育てる方策も一緒に考えるべきである。
- 少し発想を変えたアプローチも必要である。我々ローイングは、非常に多くの先輩方に支えられてきて、関与人口は非常に多い。これを活性化していくことで、様々な社会との接点を広げていくことが大事であり、これが巡り巡って、強化につながると考えている。好成績を上げれば注目されるということは、結局メディア露出を通じて社会との接点が広がるという結果論である。ローイングと社会との接点を意識的に作っていく。つまり、社会ともしっかり共

創していくことによって、結果として人口減少に抗うだけの経験者を増やすことができ、その結果、そういう中から競技成績を高めるパイプラインに乗る人が増え、それがまた社会との接点拡大につながっていく。これが本来、JARA Vision2020 が目指すローイングが息づく社会を作るための、好循環のあるべき姿ではないか。

- コースタル委員会としては、コースタルとクラシック一体で進めるところに、去年反対をした。強化の中に入ると、せっかくコースタルという新しい社会との接点が広がるのに、取り組めなくなってしまう。
- 答えは海外にある。大きなタレントと多様な経験を持った選手を、ジュニアに留まらず上の層からも育てるべき。クラシックかコースタルかで言えば、コースタルの方が可能性あり、スカル種目に専念した方がいい。
- JARA では強化本部の中に指導者育成委員会が位置づけられている。新設のテクニカル部門ではどうしてもクラシック中心となると想像するが、ぜひパラローイングやコースタルについても取り扱って頂きたい。そして三つの種別種目を一体的に推進していることを対外的に発信して頂きたい。ローイング全ての種別において高めていくところをお願いしたい。
- 強化戦略計画は今年の9月頃までに出来上がる想定だが、JARA 内の体制も課題の一つとなる。強化戦略計画を実行していくにあたり、最も適切な JARA の内部体制についても変えた方がいいという議論が出てくれば、議論し、コンセンサスを作る必要がある。
- 指導者育成の公認コーチのカリキュラムでは、コースタルとパラローイングを科目に入れ、講師を派遣いただき、取り組んでいる。
- クラシックとパラローイングとコースタルに加え、将来的にはインドア・バーチャルがオリンピック種目になるかもしれない。本件の検討過程においても重要な点である。
- パラローイングは、身の丈を意識して計画を作って実行し、その結果として財政的に黒字となっている。オリンピック競技は、身の丈とは関係ないところで計画が決まり、結果として協会の財政を食いつぶしてきたと認識。
- パラローイングは、「身の丈」の意識はあまり持っていなかった。2018 年に JARA と統合したが、単独協会だった時の辛さや苦しさをよくわかっていたので、当時の幹部の方々は「身の丈」以上のことはできないし、やってもみんな不幸になる。ヨーロッパに行くと 700,000 円の出費は固いぞということで、選手には「筋力トレーニングよりも貯金の金力を頑張れ」と一生懸命言った覚えがある。
- 色々な制限要素の中で財政力が一番の問題。人的リソースも全く足らず、わからないことだらけの中で活動するには「身の丈」を意識するしかなかった。

中小企業の経営者の感覚である。それが結果的に身の丈になった。

- 今年の強化活動は、単年度の強化方針の中で動いているが、結局ヘッドコーチ不在、新艇の購入も見送りとなり、「身の丈」にあった財源のために強化委員長が考えに考え抜いて、実業団、所属の協力をなんとか得て、なんとか海外遠征も実現している状況。
- 結果的に World Rowing の会費が上がったが、とにかくできることをやった。以前は強化がお金を食いつぶしていたかもしれない。しかし今は逆である。昨年の決算も所属団体に負担を求め、節約をしてきた。
- 強化委員会は 365 日 24 時間やっている。私はそれを見ながら、なんとかしてあげたいという思い。喫緊の課題は、タレント発掘を別の委員会や部会にするなど、体制を変えないと次の強化委員長の成り手もない。理事長として、本当に微力ながら支えているつもり。早くこの状況を打開しないといけない。
- 現体制の中で強化戦略計画が策定されるが、現場の進行状況をよく見ながら、計画を決めていただきたい。戸田の拠点はどうやって残すのか、あるいは地方の強化センターをどうやって選択して続けていくのか。戦略計画の中に盛り込んでいただきたい。今は森山体制をなんとかしたい。なんとか変えていきたいという思いである。
- 強化戦略計画を作るにあたっては、現実を踏まえたものである必要があることは、当然であろうと思う。一方で、現在の強化委員長に負担が集中している状況を解消すべく、計画の実効性についてもよく考えないといけない。
- ナショナルチーム体制の問題は、我々が抱えている大きな宿題の一つ。強化戦略計画は、事実上 2026 年度から適用される。今年度の経過期間の実態が生かされる必要は当然あるが、同時に新しい体制を打ち込まないと強化戦略計画を実行することはできないのではないかな。